

《 7月 マーケット概況 》

| 資産クラス | 指数 | 5月 | 6月 | 7月 | 当月リターン | 年初来リターン |
|--------------|-------------|-----------|-----------|-----------|--------|---------|
| 国内株式 | 日経平均株価 | 14,632.38 | 15,162.10 | 15,620.77 | 3.03% | -4.12% |
| | マザーズ指数 | 777.15 | 901.68 | 974.01 | 8.02% | 1.53% |
| 外国株式 | S&P500 | 1,923.57 | 1,960.23 | 1,930.67 | -1.51% | 4.45% |
| | MSCI Europe | 1,825.27 | 1,819.89 | 1,750.15 | -3.83% | 1.63% |
| 新興国株式 | 上海総合指数 | 2,039.21 | 2,048.33 | 2,201.56 | 7.48% | 4.04% |
| | ムンバイ SENSEX | 24,217.34 | 25,413.78 | 25,894.97 | 1.89% | 22.32% |
| 海外金利 | 米政策金利 | 0.25 | 0.25 | 0.25 | - | - |
| | 米国債 10年 | 2.48 | 2.53 | 2.56 | - | - |
| 国内金利 | 政策金利 | 0.10 | 0.10 | 0.10 | - | - |
| | 10年物国債 | 0.58 | 0.57 | 0.54 | - | - |
| 外国為替 (対円) | 米ドル | 101.77 | 101.33 | 102.80 | 1.45% | -2.38% |
| | ユーロ | 138.74 | 138.74 | 137.65 | -0.79% | -4.89% |
| コモディティー | ICE 原油(先物) | 107.94 | 112.07 | 106.02 | -5.40% | -3.85% |
| | COMEX 金(先物) | 1,246.70 | 1,322.80 | 1,282.80 | -3.02% | 6.63% |
| 不動産 | 東証 REIT 指数 | 1,565.02 | 1,598.27 | 1,616.95 | 1.17% | 6.73% |
| ヘッジ・ファンド | HFRX 指数 | 1,235.77 | 1,247.16 | 1,236.15 | -0.89% | 0.87% |

データ出所: BLOOMBERG

◆◇ 株式・債券・為替 ◇◆

[7月の金融市場]

7月の日経平均は月央までは、企業の決算発表の本格化を待つ動きや、イスラエルやウクライナの地政学的リスクの上昇から、1万 5,100 円から1万 5,500 円のレンジでの取引となっていました。為替は円高気味に推移し、月初の 102 円前半から 101 円前半へと円高に動き、月末まで 101 円台で取引されました。17 日の夜にウクライナでマレーシア航空機が撃墜された際も、日経平均株価はレンジ下限である1万 5,100 円を割込まず、底堅さを印象付けました。

その後、日本企業の決算発表が本格化すると共に株価は強含み、28 日にはレンジを上をブレイクしました。さらに 30 日に発表された米国の 2Q GDP が年率前期比で+4.0% (予 3.0%・前-2.9%→-2.1%) となったことからドル円が 102.8 円までドル高の動きとなりました。それが日経平均株価に追い風となり、前月末比+3.03%の1万 5,620 円で7月の取引を終えました。

米国の S&P500 指数は高値警戒感から 1.51% の下落、MSCI ヨーロッパ指数はウクライナリスクが嫌気され、前月比-3.83%と大き目の下落となりました。

日本では長期金利の低下が継続しました。また、7月 10 日に短期国債3ヶ月の入札前取引で-0.002%とマイナス金利がつき、短期国債への需要の強さを印象付けました。米国では短期金利は上昇、長期金利は横ばいとなりました。

[今後の相場見通し]

日経平均株価は、年初来の高値の更新が間近に迫る水準まで上昇しました。日経平均の今年の高値は1万 6,164 円、昨年末の高値は1万 6,320 円となっています。日本企業の決算発表はこれまでのところ予想を上回るものが多く、また米国、中国の経済指標は良好な値が目立ちます。

懸念材料は、調整局面に入ったかに見える米国株が挙げられます。S&P500 のオプション価格から求められる VIX 指数は前月末の 11% から 16% へと急上昇を見せています。米国株はここ三年間、大きな調整が無かっただけに、今後行われるであろう FRB による利上げを織り込む動きから長めの調整に入るかも知れません。

その影響は日本株にも及ぶかというのが今後を予見する点で最も重要でしょう。そのポイントとなるのは 13 日に発表される日本の GDP です。現時点のアナリスト・コンセンサスは年率前期比-7.1%と非常に悪い値となることが予想されています。そのため、今後の展開としては日銀の追加緩和期待や、12 月の消費増税回避期待などが再び醸成されることが考えられます。これらから日本株は目先、下値リスクは小さく、日経平均で1万 5,000 円が下値目処ではないかと見られます。

また、11 月に日中首脳会談が実際に行われるならば、安倍首相の靖国神社参拝以降、手を引いた海外資金も再び日本市場に流れ込むと思われれます。支持率が低下傾向にある安倍内閣が再び経済対策メインに戻るなら、米国が調整に入ったとしても日本株は底堅く、上値も狙えるでしょう。

チャートから見た投資戦略④

今月は、「チャートから見た投資戦略」の4回目です。

【日経平均終値の日足】



上表は2012年10月以降の日経平均終値の日足と、それを拡大した2013年10月以降の日経平均の日足です。移動平均線はそれぞれ10日、20日、100日で設定しました。

日経平均は、2012年11月の安値と2014年3月の安値を結ぶトレンドライン①を割り込んで下落し、4月14日には今年の年初来安値である13910.16円をつけました。その後、14000円から14500円のレンジでもみ合っていました。2014年5月下旬には2013年12月の高値と2014年4月の高値を結ぶトレンドライン②を突き抜け、再び上昇を開始しました。

そして現在、ペナント型のような保ち合いチャートパターン③を上抜けて、上昇を継続しています。さらに100日の移動平均が上向くことでその上昇トレンドを後押ししています。

今後の日経平均は、2013年12月末の高値16291.31円を抜けて高値を更新していくのか、あるいは2014年5月の安値と2014年の7月の安値を結ぶトレンドライン④や、2012年11月の安値と2014年5月の安値を結ぶトレンドライン⑤を下に抜けて下降トレンドへと切り替わるのかが注目されます。

【日経平均終値の週足】





次に日経平均終値の週足を見てみます。

日経平均は2013年12月末の終値を高値にして下落していましたが、1989年12月の高値と2013年5月の高値を結ぶトレンドライン⑥が支持線として機能し、再び上昇を始めました。

今後は、2012年11月の安値と2014年5月の安値を結ぶトレンドライン⑨を割り込むことなく、1989年12月の高値と2013年12月の高値を結ぶトレンドライン⑦や、1996年6月の高値と2013年の12月の高値を結ぶトレンドライン⑧を上抜けて、上昇トレンドを継続することができるのかを試されています。

[今後の投資戦略]

日経平均は、保ち合いのチャートパターンを上抜けましたので、しばらくは買いを中心に考えていいのではないかと思います。しかし、トレンドライン④⑤⑨を下抜ける場合は下降トレンド入りする可能性があるために注意が必要です。

・日経平均の終値が、週足でトレンドライン⑦⑧を上抜ければ買う。もしくは10日、20日の移動平均あたりまで下落したところで買う。ロスカットは日経平均の終値がトレンドライン⑤や⑨を割り込んだ時、または10日の移動平均が20日の移動平均を上から下に割こむデッドクロスを形成したときに設定します。

今日の相場の格言は？

「明日、〇〇株式を成行で□□,000株買う！」と、意気込み眠りに就くも、翌日の想定外な気配を目の前に躊躇してしまい、寄りの安値を逃してしまうという事は、株を取引きされる方なら一度は経験した事があるでしょう。

投資において、最大の決め手となるのは銘柄選びもさる事ながら、売買における決断であると言っても過言ではありません。しかしその決断が最も難しく、いざという時、行動に踏みきれず悔しい思いをされた方も少なくはないはずです。日頃からの「心構え」がものを言う場面です。

そこで今回は、的確な決断を下す上で重要な「心構え」を持つにあたり、ヒントとなる「格言」をいくつかご紹介致します。

☆行き過ぎもまた相場

株式相場が、一般的な見方では説明が出来ないような水準まで、上昇したり下落したりすることがあります。しかし、これも相場の内と理解し、納得しなくてはならないという事です。株価はしばしば、実体とはかけ離れた評価をされると認識しておく事が大切です。

☆売りは早かれ、買いは遅かれ

上昇相場はじわじわと推移していくのに対して、下落相場は売りが売りを呼び、急落する事が少なくありません。その為、売りは素早く行い、買いはじっくり構えて行うべしという教訓です。

☆買いたい弱気、売りたい強気

これから上がると想定し買いたいが、少しでも安く買いたいが為に、下がって欲しいと弱気な相場感を持つ事が買いたい弱気。一方売りたいが、少しでも高く売りたいが為に、上がるのを待っている事を売りたい強気と言います。それが高じて、ますます弱気・強気な相場観に陥ってしまい相場を見誤ってしまうという事の例えです。買うと決めたら買い、売ると決めたら売る事が大事であるという格言です。

☆買いにくい相場は高い、買いやすい相場は安い

一般的に、価格が上昇して買いにくい相場の場合は更に高くなりがちで、買えずにそのまま値上がりしてしまう。しかし、値段が下がってきて買いやすいと思われる相場は、上がりにくいという意味です。

☆閑散に売りなし

この格言は、商いが少なくなり閑散としている時には、保有株を売却したり、空売りをしたりしてはいけないと戒めています。

一般的に、相場が動かない風の状態が長引くと、値動きの悪さから多くの投資家が保有株を売却したくなるものです。特に、そんな状況を逆手に取り、意図的に売ってくる向きもあり、相場は再び下げ歩調となる事があります。しかしその売りが一巡すると、買いを待っていた多くの投資家が「底」と見計らい買に転じます。その結果、出来高を伴い上昇し、持合いを嫌気して売却した投資家は儲けそこなう(空売りをした人は損もしくは評価損を抱える)という傾向にあります。

☆天井三日、底百日

これは、株価の一般的な値動きを表す格言です。株価は上昇したとしても、高騰して高値で推移するのはごく僅かな期間であるという意味です。また、株価の周期は「小回り三月、大回り三年」と言われます。短期の波動は3カ月、長期は3年間を周期として考えるべきだという格言です。

☆二度に買うべし、二度に売るべし

自分の見通しにいくら自信があっても、下した判断が正しいかどうかは、後になってみなければわかりません。そこで、一気に売ったり買ったりするのではなく、何回かに分けて行動せよという戒めです。

☆人の行く裏に道あり花の山

この格言の由来は、花見で人が大勢いるところを避けて裏道を行くと、花がたくさん咲いている場所に出たという例え話から生まれました。転じて、株式相場において人と同じ事をしていては儲ける事は出来ないという事です。つまり、逆張りを意味します。

米ウォール街でも「Buy when others sell; Sell when others buy.(人が売るときに買い、人が買うときには売れ)」と言われるようです。

類似:「友なき方へ行くべし」、「相場師は孤独を愛す」

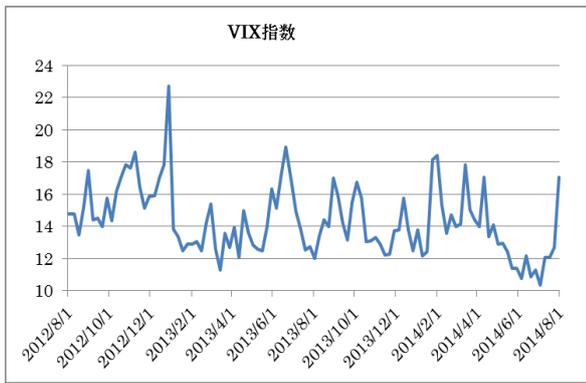
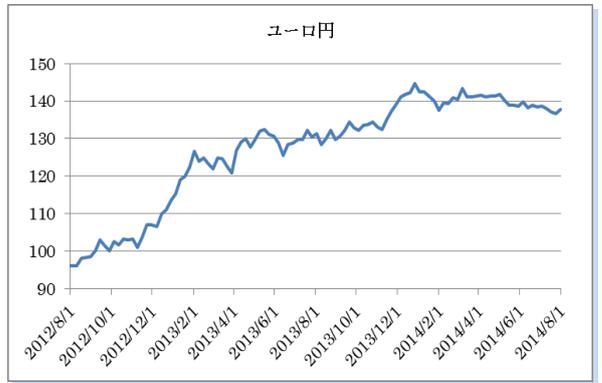
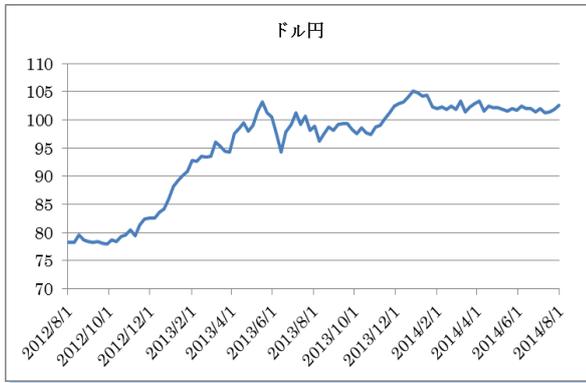
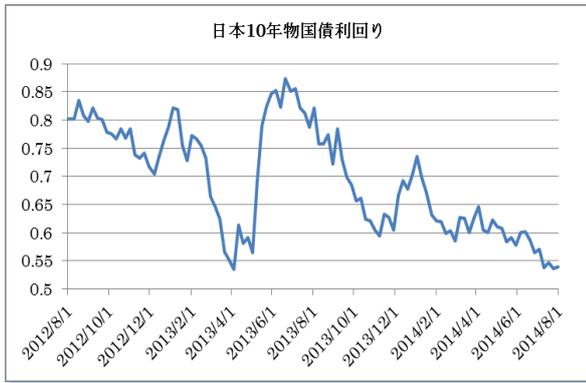
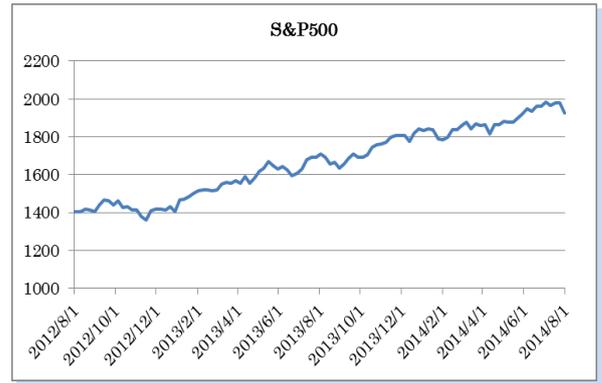
☆見切り千両

これは買った株が下落し、居ても立ってもいられないという状態の中においては、反転を期待して持っておくのではなく、早々に損切りする事で千両の価値があるという教訓です。

米ウォール街では、「Cut loss and let profit run(損は落とせ、さらば利益は大ならん).」と言われるます。

いかがでしょうか。どの格言も、「成程」と納得できるものが多く、日々の相場に当てはまるものも多いのではないのでしょうか。しかし、ここで納得できたからと言って、即時行動に移せるかと言うと別問題です。日頃からしっかりと「心構え」の基、目先の相場に左右されない投資スタンスを貫きたいものですね。

◆◇ 指標・為替チャート ◇◆



《執筆者》

株式・債券・為替 … 小川 英幸

そうだったのか！「知って納得、証券投資」Vol.60-① … 野上 信彦
チャートから見た投資戦略④

そうだったのか！「知って納得、証券投資」Vol.60-② … 金井 良記
今日の相場の格言は？

本資料は、情報提供のみを目的として作成したもので、いかなる有価証券等の売買の勧誘を目的としたものではありません。また、一般的あるいは特定の投資助言を行うものでもありません。本資料は、信頼できると判断した情報源から入手した情報・データ等をもとに作成しておりますが、これらの情報・データ等また本資料の内容の正確性、適時性、完全性等を保証するものではありません。情報が不完全な場合または要約されている場合もあります。本資料に掲載されたデータ・統計等のうち作成者・出所が明記されていないものは、当社により作成されたものです。本資料に掲載された見解や予測は、本資料作成時のものであり予告なしに変更されます。過去の実績は将来の成果を予測あるいは保証するものではありません。

K 光世証券株式会社

金融商品取引業者 近畿財務局長（金商）第 14 号 加入協会：日本証券業協会

本店 / 〒541-0041 大阪府大阪市中央区北浜 2-1-10 TEL:06-6209-0821

東京店 / 〒103-0026 東京都中央区日本橋兜町 9-9 TEL:03-3667-7721

